特定非営利活動法人 KAWASAKI アーツ

事 業 報 告 書

自 平成 31 年 4 月 1 日
至 令和 2 年 3 月 31 日

Ⅰ．事業活動に関する事項

[主催事業]

１．KAWASAKI しんゆり映画祭

■　2019年度　ボランティアスタッフ説明会
期日：2019年5月18日（土）①11:00　/　②13:30
会場：麻生市民館料理室

期日：2019年5月23日（木）③14:00　/　④19:30
会場：川崎市アートセンター　3F コラボレーションスペース

期日：2019年5月26日（日）⑤11:00 / ⑥15:30
会場：川崎市アートセンター　3F コラボレーションスペース

新規ボランティアスタッフ募集を上記日程で実施。本年の説明会の実施日・場所・回数も昨年の実施内容を鑑みて設定。昨年度は、土日の午前午後の計4回の実施だったが、今年度は平日の午後・夜間を含む計6回を実施した。
これは、近年減少傾向にある、平日に稼働できる主婦・学生・シニア層を確保することを目的とした。

ボランティアスタッフ募集の告知方法は例年どおり、市内公共施設へのチラシ配布、市政だより、映画祭ホームページ等で行った。
前年同様に1年間を通して参加できるスタッフを募集し、結果25名の方が新たにスタッフとして登録し66名での活動となった。映画祭スタッフの活動期間は、4月～翌年3月。（新スタッフは6月～翌年3月）
ボランティアスタッフの活動セクションは、プログラム（経験2年以上）、バリアフリー、ジュニア映画制作ワークショップ、野外上映会、美術、ホームページ、チラシ作成、プレス、SNS記録、協賛・寄付、カフェ・屋台、運営サポートスタッフ（猫の手）、運営委員会、にそれぞれが属して活動を行った。

■　2019年度　ボランティア全体会

期日：2019年3月～2019年12月
内容：映画祭事業の連絡、各セクションの活動報告・打合せ、ボランティア交流
会場：川崎市アートセンター　ほか

ボランティア全体が集まる全体会を1～2か月に1回程度実施した。映画祭運営委員会や単年度実行会議で決定された情報の共有や軽作業（ダイレクトメール発送準備など）も行われた。
2019年度の開催日は3/23、4/13、5/18、6/8、7/6、8/3、8/17、9/7、9/21、10/19、11/9、11/17、12/22、2/22の計14回。

■　2019年度　ボランティアスタッフ研修

期日：2019年9月28日（土）
内容：ボランティア研修　～施設利用ガイダンス
会場：川崎市アートセンター（小劇場・映像館）

川崎市アートセンターをメイン会場として映画祭を実施していることから、アートセンター職員の協力を得て施設の特徴や利用方法について、研修を実施した。2つの会場で使用内容や注意点が異なることもあり、各会場を実際に見ながら使用方法、避難経路の確認、設備の特徴の確認を行った。上映素材の種類、接客のポイントなど多岐にわたり、新規のスタッフはもちろん長年映画祭のスタッフを務めてきたメンバーも改めて再確認を行う場となり、本番前に欠かせないものとなっている。

■第20回ジュニア映画制作ワークショップ　協賛：小田急電鉄株式会社

参加希望者向け説明会
期日：2019年5月26日（日）13時 / 14時
会場：川崎市アートセンター3F

映画制作ワークショップ
期間：2019年6月16日（日）～7月15日（月・祝）　完成作品発表会：10月27日（日）
場所：川崎市アートセンター、新百合21ビル、三井ホーム、ELE HOUSE
参加者数：9名　（チーム名　おざきの白米、ミズキルーペ）

川崎市とその周辺に在住・在学している中学生を対象とした映画制作ワークショップを開催。活動開始20年目を迎える当ワークショップは、2019年度内容を、中学生の個人とチームの自主性をより活かすことを念頭に、完成作品市民ボランティアの共同体験重視の内容に変更。
活動の実施日も、中学生も市民サポートスタッフもが参加しやすい週末中心・短期集中の全6日間に変更。中学生に監督・脚本家・俳優・カメラマン・ 編集者などいろいろな役割を体験してもらう。
大人が手心を加え作品のクオリティを上げ整えることは最小限に抑え、中学生自身の好奇心と積極性、創意工夫に重きを置き、より体験重視のワークショップへとシフトチェンジした。
中学生の体験のサポート体制として、生徒との共同映像制作指導の経験を持つ、中山（代表）がプロデューサーを担当。例年のように"指導講師制"は採用せず、映像制作を学び実地経験のある大学生（日本映画大学・和光大学）が技術指導スタッフを担当。2チームに分かれての活動となった。
さらに高校生から70歳までの幅広い年齢の映画祭ボランティアスタッフのべ30名が中学生とチームになり、活動を支えた。
5月中旬より川崎市教育委員会の協力により、市内公立中学校生徒に参加説明会チラシとポスターを配布。（本年度は、全中学校に送付はしたものの、各全校生徒分のチラシ枚数配布はせず、各クラスに数枚ずつクリアファイルに入れた、壁掛けできる自由持参可能なスタイルのものを手作りして、A3サイズのポスターと共に送付した。ポスターも麻生区内の中学生作成のイラストを採用。）

例年は、長期に渡る本格的な内容だったため、スケジュールの調整・確保の上参加率を上げられるかの検討と実施内容への理解賛同覚悟を持ってもらう為、説明会を必須にしていたが、今年は募集期間を5月26日～6月7日とし、説明会不参加でも申し込み可能とし、申し込み用紙をWEB上からでも入手できるようにした。
また、参加自由で説明会を5月26日（日）に1時間のものを13時からと14時からの2回、川崎市アートセンター３Fにて実施した。

【初日】
6月16日（日）は、午前中は参加生徒とスタッフの顔合わせとオリエンテーションを行った。
午後は機材講習。撮影用機材に触れ、テスト撮影を実施。

【2日目】
7月7日（日）は、グループに分かれて短編撮影を実施。「待ち合わせ」をお題に、午前中は各人オリジナルストーリーを4コマ漫画にし、作品群の中から撮影したい且つ限られた時間内で実現可能な作品を話し合いで選出。午後は新百合21ビル内にて撮影。交代で様々な役割を体験。

【3日目】
7月14日（日）は、2チームに分かれ「わが家のすったもんだ」というお題で中学生が書いた短編の脚本を撮影した。午前中、チームごとにリハーサルを実施。午後は、地元で撮影場所を提供していただいた、三井ホーム（住宅展示場のレンタルハウス）とエレハウス（コミュニティレンタルスペース）の2か所に分かれて撮影を実施した。

【4日目】
7月15日（月祝）は、前日と同じチームで、前日とは違う別の脚本の撮影を実施。撮影場所も昨日と交換して、中学生の役割も前日とは違うものに交代。前日の撮影の反省を活かそうと積極的に段取りや工程に工夫をする中学生たち。限られた時間内での撮影に苦労しつつも、短期間で様々なことを吸収し、その場で仲間とコミュニケーションをとりながら活かしていく姿勢が随所に見られた。

【5日目】
7月21日（日）は編集作業。これまでに撮影した短編7本分を、編集担当者を決め、大学生から編集操作の説明を受け、3日目4日目で撮影した素材の編集を進めた。気になったことはすぐに大人に相談し、次々に解決していた。作業の中でタイトルをアニメーション付きにする、ナレーションを録音して追加する等、音と映像の細かいこだわりの実現に熱中していく姿が見られた。また、午後は3人1組となり、アートセンター周辺の路上で、アポなしのインタビューを実施。自分たちで撮影交渉をし、「中学生の時の夢」と「いまの夢」を質問して、撮影録音した。知らない大人に声をかけることに緊張していた中学生も、次第に積極的にたくさんの通行人にインタビューを敢行した。

【6日目】
7月28日（日）のワークショップ最終日は、残りの編集・音楽作成・音入れ・エンドロール作成・チラシ作成を分担して作業した。午後は、「我が家のすったもんだ」に客演として、参加してくださった方々を迎えて市民スタッフも一緒に、完成試写会を実施。司会も中学生が担当。話す内容や構成も自分たちでアイディア出しをして決めた。上映は中学生の切り回しで盛り上がり、客演の方からも賛辞の言葉をいただいた。上映後、ワークショップ全体の振返りでは、技術レクチャーをした大学生への親しみを込めた感謝の言葉が、多くの中学生から出た。6日間のワークショップはこの日で完了。

20回目のワークショップにして、初めて"指導講師"を設けず、事前の企画準備段階から何度も市民スタッフで会議を重ねた。どのようなことを中学生に体験してもらうか、限られた規模の中で安全且つ最大限楽しんでクリエイティブな時間を過ごしてもらうためには、どこまで準備をしておくか、昨年までプロに頼っていた部分も、市民スタッフが検討を重ね実施した。毎回のワークショップ終了後も市民スタッフの反省会と次回準備を実施し、それが安全やワークショップの充実度に反映されていた。

そして、10月27日（日）にKAWASAKIしんゆり映画祭（会場：川崎市アートセンター・アルテリオ小劇場195席）にて一般の観客を入れて上映し、参加生徒による舞台挨拶が行われた。

■ワークショップ参加生徒

■ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾜｰｸ風景

■屋外撮影風景

■ロケ撮影風景

■ﾄﾞｷｭﾒﾝﾀﾘｰ撮影風景

■編集作業風景

■第20回 野外上映会　共同主催：麻生区

期日：2019年8月24日（土）
場所：川崎市立西生田小学校　校庭
参加者数：695名（延べ来場者数）

20回目を迎えた本年度の野外上映会は、「西生田小学校」で初めての実施となった。上映作品は『活弁付きドタバタコメディ短編集』として、1）ドタバタ撮影所（活弁士：山内菜々子）、2）チャップリンの冒険（活弁士：山内菜々子）、3）爆進ラリー（活弁士：山城秀之）、4）チャップリンの番頭（活弁士：山城秀之）を活弁付きで上映した。
広報活動は、川崎市や麻生区の広報誌への掲載の他、タウン誌への掲載、小学校へのチラシ配布等を7月より展開。麻生区の紹介による地元町内会へのチラシの回覧などが行われた。会場となる小学校に隣接する住宅へは直接イベント実施のご挨拶に伺った。

西生田小学校での初めての野外上映会ということで、よりイベントとしてのライブ感を出すため、活弁付き上映の企画が組まれた。上映時間中の夕立に対しての注意が払われたが、天候は崩れることなく終えることができた。
屋台コーナーは8店舗で実施。実施内容としては、NPO法人アルデンテ（そばめし等）、隠れ家食堂（焼きそば等）、みなせん154（お好み焼き）、小泉農園（ジェラート）、風知草（カレー等）、高石町内会（防災アンケート）、多摩美子ども会（おもちゃ等）、スタッフ屋台（プリン等）の販売が行われた。飲み物として、ソフトドリンクとアルコールが各店舗において販売され、大人から子どもまで地域のお祭りとして来場者に楽しんでいただいた。
麻生区総合防災訓練のPRも上映前の時間を使って行われた。ゲームコーナーでは上映作品をモチーフにした箱積みゲームなどが行われた。
18時30分に映画祭代表の中山による挨拶、多田区長のご挨拶、来賓紹介に続き、短編アニメーション「映画の妖精　フィルとムー」の上映を行い、19時より活弁付き上映が開始された。
今年度の看護師派遣も、株式会社ナチュラルハートコーディネートへ依頼をしたが、観客で体調を崩された方はいなかった。

■会場入口風景

■開場風景

■開場中のグラウンドの様子

■箱積みゲーム

■福笑いの様子

■スタッフ屋台の様子

■開会挨拶

■活弁士：山城氏・山内氏による解説

■上映時の様子

■第25回KAWASAKIしんゆり映画祭2019

□ 本祭実施概要

●主　　催　　NPO法人KAWASAKIアーツ
●企画・運営　　NPO法人KAWASAKIアーツ・KAWASAKIしんゆり映画祭
●理　事　長　　藤田朝也
●映画祭代表　　中山周治
●共　　催　　川崎市、川崎市アートセンター、川崎市教育委員会、日本映画大学、昭和音楽大学
（一財）川崎新都心街づくり財団
●後　　援　　新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム、麻生区文化協会、
（公財）川崎市生涯学習財団、NPO法人しんゆり・芸術のまちづくり、
「映像のまち・かわさき」推進フォーラム、ＦＭヨコハマ、かわさきFM（79.1MHz）、
朝日新聞川崎支局、東京新聞川崎支局、毎日新聞川崎支局、読売新聞川崎支局、
（株）タウンニュース社、株式会社エリアブレイン（MYTOWN編集部）、
（株）メディスタくらしの窓新聞社、J:COM
●協力・協賛　　小田急電鉄（株）、新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム、
（株）エーイーティー、小田急新百合ヶ丘エルミロード、（有）柿生恒産、
（株）カジノヤ、川崎医療生活協同組合あさお診療所、川崎商工会議所、川崎信用金庫、
（株）川崎フロンターレ、河津造園土木（株）、新百合ヶ丘商店会、
新百合丘農住都市開発（株）、セレサ川崎農業協同組合、ホテルモリノ新百合丘、
三井不動産リアルティ（株）、三井ホーム（株）、カンガルー、Ti-da Bar、
アジア料理JASMINE、パティスリーエチエンヌ、チャンキー・チャンキー、
（株）北島工務店、イオンシネマ新百合ヶ丘、イオンスタイル新百合ヶ丘、
●期　　間　　10月27日（日）～ 11月4日（日）　[10月28日（月）休映]
●会　　場　　川崎市アートセンター・映像館（113席）、小劇場（195席）
●上映作品数　　一般公開作品23本
＋ジュニア映画制作ワークショップ2019年6本＋ジュニア20周年6本
●登　壇　　24名＋2団体
●総入場者数　　2477人
●ボランティア　66名

2019年度のKAWASAKIしんゆり映画祭は川崎市アートセンター・アルテリオ映像館・小劇場の2会場で上映を行い、有料21作品・無料3+中学生制作12作品で、全36作品46回の上映を行った。
『11.25自決の日 三島由紀夫と若者たち』『止められるか、俺たちを』（配給：若松プロダクション）を各2回上映予定だったが、上映候補作品であった『主戦場』（配給：東風）の上映を見送ったことで、出品取り下げとなった。プログラム発表時の予定を変更し、映画祭期間中に『主戦場』を無料上映で1回実施し、これに伴い『止められるか、俺たちを』も無料上映として1回上映が行われた。

地域とのつながりをもった上映イベントの充実や、独自収録を行ったオーディオコメンタリー付き上映、25周年記念としての佐藤忠男氏セレクションによるアジア映画の上映なども行われた。
近年の活躍も目覚ましい井浦新氏の特集上映が組まれ、柳下美恵氏による生伴奏付き上映、映画に関連する地域のお店の方のトークの場、地域の音楽サークルによる市民演奏など、推薦スタッフ（市民プロデューサー）がそれぞれの視点から、観客と作品、創る人、観せる人がつながる機会を創出することができた。
バリアフリー上映では、『洗骨』に対して副音声ガイドを作成し上映を行ったほか、バリアフリー字幕付き上映、保育付き上映を実施した。昨年度実施した「親子映画鑑賞会」は「しんゆりこどもシネマ」に名称を改めて、実施された。

■　4月～8月 プログラム選定

2016年から実施している、ボランティアスタッフ内から上映作品案を募り、投票して上位作品を上映するという方法を取り入れた4年目となった。昨年度の反省点を活かして、作品の募り方や投票方法の改善が行われた結果、昨年とはまた違ったスタッフからの応募もあり、徐々に浸透が見受けられた。プログラム委員で、継続枠の上映作品選定や全体調整等を4月～8月まで定期的に会議を実施し確定させた。

■　8月～10月 広報宣伝物、WEBページ等の作成

プログラム決定を受け、チラシの制作やホームページ・Facebook・twitterの更新等が行われた。昨年同様A4リーフレット（12ページ仕様）を作成、来場ゲスト情報も加えた上映作品情報に加えて、街の情報なども入れた充実の内容となった。各個別企画のチラシも市民スタッフの手で作成された。

■　9月～11月　広報活動

　映画祭がスタートした1995年から実施している駅前でのポスター展を今年も実施した。また、川崎市の協力による川崎駅アゼリアビジョンでの予告編の放映、麻生区の協力による駅前のバスターミナルの柱巻広告も実施した。小田急電鉄の協力による駅構内への映画祭ポスターの掲示、川崎市アートセンターでの入場時間を利用しての予告編上映など、など実績のある広報を中心に展開された。映画館へのチラシ設置も継続して積極的に行われた。
　グランマルシェや子育てフェスタなどへも参加し、地域イベントでの広報を行った。

■駅前ポスター展

■麻生区協力による柱巻広告

■駅頭チラシ配布

■ KAWASAKIしんゆり映画祭（本祭）

期日：2019年10月27日（日）～11月4日（月・祝）　※10月28日（月）休映日
場所：川崎市アートセンター　アルテリオ映像館・アルテリオ小劇場

川崎市アートセンターの映像館、小劇場にて国内外の秀作の上映を行った。
2019年は、立場や経験、この世とあの世、自然と不自然、知っている世界と知らない世界、国境、価値観の違い等、様々な境界を超える作品が多く並んだため、「とびだせ まだ見ぬ世界へ！」というリーフレットキャッチコピー「Across the border～のり越える想い～」というプログラムキャッチフレーズをつけた。

■オープニング代表挨拶

■しんゆり映画祭劇場前掲示物

■しんゆり映画祭会場前の様子

■金平様ご登壇の様子

■井浦新様と是枝監督

■加納監督と関山様

■柳下美恵さん演奏風景

■甲斐監督と菜葉菜様と井浦様

■三宅監督上映前挨拶

■「あいが、そいで、こい」

■「天然☆生活」トーク

■「止められるか、俺たちを」

【特別企画】

□　10月27日（日）・10月30日（水）しんゆりこどもシネマ 「若おかみは小学生！」

しんゆり映画祭では昨年7年ぶりに復活した「しんゆり映画祭親子上映会」を、「しんゆりこどもシネマ」とブラッシュアップし、こどもから大人まで広い世代に一緒に楽しんでもらえる名作企画を用意した。チケットは家族みんなで見やすいように、通常上映よりも価格を抑えめにし、さらにお得な親子（実際には親子関係でなくても、大人1人・子供1人で使用できる）ペア特別割引チケットを設定した。
野外上映会での観客（こども、家族層）に、野外上映会をきっかけに、劇場での映画体験を楽しんでいただくことを目的に実施。
さらに、今年度はこの「しんゆりこどもシネマ」をオープニングに据え、映画の舞台の日本旅館にちなみ、上映前に和太鼓演奏のイベントをつけた。演奏したのは、地元のイベントでの演奏経験も豊富な市民の集まり、和太鼓の会『雷鼓』のみなさん。映画祭の開幕を、迫力ある演奏で盛り上げてくださった。上映後には、お子様にお菓子のプレゼントも実施した。
昨年より続けて企画実施したこの親子向け上映も、少しずつ浸透してきているのか、昨年と比べ来場者が増え、一定の手ごたえを感じられる上映となった。一方で、平日夕方の上映は、当初学校帰りのこどもたちが、友人を誘ってこどもだけでも見られるように設定した枠だったが、こちらは集客が及ばず、上映のタイミングに工夫の余地があることがわかった。

■上映前挨拶

■上映前イベントの様子　和太鼓「雷鼓」

□　11月4日（月・祝）　「主戦場」　【追加上映】

上映の取りやめを予定していた「主戦場」を、10/30に行ったオープンマイクイベントで寄せられた声を受けて再度映画祭内で検討し、最終上映作品として11/4に映像館で無料上映を行った。当日の朝から整理券を配布し、250名程度の希望者が集まり、抽選で当選したお客様にご覧いただいた。上映前にはミキ・デザキ監督による挨拶も行われた。

■上映前挨拶　ミキ・デザキ監督

○オープンマイクイベント『しんゆり映画祭で表現の自由を問う』
日時：2019年10月30日（水）19：00～21：00
場所：川崎市アートセンター3階コラボレーションスペース
呼びかけ人：大澤一生（「沈没家族」配給会社ノンデライコ代表）
纐纈あや（「ある精肉店のはなし」映画監督）
映画製作者、関係者、市民、映画祭スタッフが垣根を越えて
「表現の自由」を問い、話し合うオープンマイクイベントを行った。

□　10月27日　ジュニア映画制作ワークショップ発表会　（会場：アルテリオ小劇場）

今年度も「ジュニア映画制作ワークショップ」の完成作品発表会をアルテリオ小劇場にて実施。制作に関わった中学生や家族のほか、一般の観客も鑑賞に訪れた。完成短編作品6本と、街頭インタビューの1本の合計7本とメイキング映像の上映後、参加した中学生の舞台挨拶、映画祭顧問の千葉茂樹による講評を行い、今年のワークショップの様子を振り返った。

□　10月29日、11月24日　ジュニア映画制作ワークショップ20周年記念

（会場：アルテリオ映像館／新百合21ホール）

今年度に20年目を迎えたジュニア映画制作ワークショップを記念して、10/29に過去作品の中からセレクション上映を行ったほか、11/24にはワークショップに深くかかわった人々のインタビューで構成されたドキュメンタリーの上映と過去掲示物の展示、川崎市アートセンターの村上朗子氏の協力をいただいたミニワークショップなどを行った。

■ドキュメンタリー上映前

■ミニワークショップの様子

■集合写真

□　バリアフリーシアターの実施（10月30日、11月2日、3日　）

●副音声ガイド付上映

10月30日（水）、11月2日（土）上映の『洗骨』上映に関して、視覚障がい者向けの副音声ガイドを映画祭独自に制作し・提供を行った。（サービス利用者数・13名）

●日本語字幕付上映

10月30日（水）、11月3日（日）の『ある精肉店のはなし』に関して、聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて上映を行った。

●保育付上映

10月30日（水）上映の『沈没家族　劇場版』『洗骨』に関して、6ヵ月～4歳までのこどもを預かる託児サービスを実施。保育グループ「ジャンケンポン」と提携して実施し、保育者を派遣してもらい、保護者の映画鑑賞時間中、こどもを預かった。

□　11月2日（土）～11月4日（月・祝）　シネマウマカフェ　（会場：3Fコラボ）

昨年度に引き続き、上映会場であるアートセンター3Fコラボレーションスペースにおいて、近隣の飲食店と提携した「シネマウマカフェ」を開設した。日替わりでお弁当、コーヒーなどの提供を行い、来場者に地元のお店を紹介し、その味を楽しんでもらうことができた。
シネマウマカフェ参加店舗
「ムビリンゴ（読売ランド前）」、「NARUTO Coffee&Roasters（狛江）」「醸（狛江）」

■ナルトコーヒー

■醸

□　11月2日（土）　ジャズイベント 「サッドヒルを掘り返せ」

映画と地元が好きな男たちが始めた、映画ロケ地の探索・再生がやがて世界中のファンを巻き込んで行く様が、市民が「好き」という情熱だけで、1年かけてお客様に映画を届け、熱狂を共にするしんゆり映画祭とその姿が重なる映画「サッドヒルを掘り返せ」。
地元で「音楽・ジャズが好き」という市民の集まり、新百合ヶ丘発祥のジャズビックバンド「ニューリリィアンサンブル」に、上映前に迫力ある映画音楽で盛り上げてもらった。

上映前イベント　ニューリリィアンサンブルによる演奏

□　映画祭との連動イベント

■ハロウィンパレード（10/27）が、映画祭オープニングと日程を合わせてアートセンター前にて実施。

第25回　ＫＡＷＡＳＡＫＩしんゆり映画祭2019上映作品

◇リーフレットキャッチコピー　「とびだせ まだ見ぬ世界へ！」　Across the border～のり越える想い～

【役者・井浦 新の軌跡】
　「止められるか、俺たちを」「赤い雪 Red Snow」「ワンダフルライフ」
　　※上映中止作品「11.25自決の日 三島由紀夫と若者たち」
【ひろがる　つなげる　つたえる】
　「よあけの焚き火」「ある精肉店のはなし」「洗骨」「沈没家族」
【アメリカの"NOW、"，アメリカの"WHY？"】
　「記者たち～衝撃と畏怖の真実～」「バイス」「華氏119」
【インドのおじさんが教えてくれたこと】
　「バジュランギおじさんと、小さな迷子」「パッドマン　5億人の女性を救った男」
【柳下美恵のピアノdeシネマinしんゆり】
　「掟によって」
【映画の魅力を伝えたい人々！inしんゆりヒル】
　「サッドヒルを掘り返せ」
【「身近な人がマジコワい」特集】
　「ゲット・アウト」「ヘレディタリー / 継承（オーディオコメンタリー上映）」
【あれも青春！これも青春？】
　「天然☆生活」「あいが、そいで、こい」
【佐藤忠男さんと振り返るアジア映画inしんゆり】
　「冬冬の夏休み デジタルリマスターバージョン」「ブンミおじさんの森」
【聞く・話す・考える～ヒントときっかけ～】
　「おクジラさま　ふたつの正義の物語」
【しんゆりこどもシネマ】
　「若おかみは小学生！」
【しんゆりバリアフリーシアター】
　　「ある精肉店のはなし」(バリアフリー日本語字幕付)、「洗骨」(副音声イヤホンガイド付)
　　「沈没家族 劇場版」「洗骨」（保育サービス付き）
【追加上映作品】「主戦場」

合計23作品

【ジュニア映画制作ワークショップ2019】
〇4コマ映画制作[待ち合わせ]『おさるの惑星』『騙された変態 - マリちゃんと僕 - 』
〇短編製作[わが家のすったもんだ]『母の裏の顔』『還ってきた爺ちゃん』『私の由来』『蜘蛛』
〇しんゆり街頭ドキュメンタリー『叶うといいなッ！みんなの夢』

【ジュニア映画制作ワークショップ20周年セレクション上映】
『ドジ』『夏休みのエトセトラ』『かけはし』『スイッチ』『ムッツマン』『ANOTHER PROLOGUE』

ジュニア映画制作ワークショップ関連上映作品　合計13作品（※短編）

登壇者　（敬称略、順不同）

雷鼓（和太鼓）、金平茂紀（ジャーナリスト）、土井康一（監督）、大藏康誠（俳優・狂言師）、是枝裕和（監督）、井浦新（俳優）、加納土（監督）、関山隆一（保育園理事長）、畑 肇（精肉店店主）、ニューリリィアンサンブル（ジャズビッグバンド）、菜葉菜（俳優）、甲斐さやか（監督）、柳下美恵（ピアニスト）、柴田啓佑（監督）、小川あん（俳優）、髙橋雄祐（俳優）、長部努（俳優）、五十嵐美紀（俳優）、穂村有希（俳優）、永山正史（監督）、川瀬陽太（俳優）、三枝奈都紀（俳優）、白石和彌（監督）、辻智彦（撮影）、大西信満（俳優）、ミキ・デザキ（監督）

合計24名+2団体

動員数データ

チケット売上枚数　2221枚　観客動員数　2477名
有料プログラム数　19プログラム（19作品）
無料プログラム数　2プログラム（短編13作品）　※ジュニア映画制作WS関連
追加無料上映　2プログラム（2作品）※「止められるか、俺たちを」「主戦場」
上映プログラム数　23プログラム（32作品）

合計上映回数　46回

今年度の総括と来年度への取組み

2019年度は上映作品32作品中、有料上映19プログラム（19作品）、無料上映4プログラム（2作品＋ジュニアWS作品）となった。川崎市アートセンター映像館・小劇場を会場に、10/27（日）～11/4（月祝）で開催し、期間中の10/28（月）は休映日とした。

有料上映の単体上映回では10/29の「ワンダフルライフ」のゲストトーク付き上映回が1番の入場者数を記録した。昨年の「親子映画鑑賞会」を「しんゆりこどもシネマ」として更に、幅広い世代に劇場に足を運んでいただく施策としての定着を狙った企画の改良も行われた。総動員数は2477名となった。

バリアフリーシアターでは継続して行われている独自作成した副音声ガイドをつけての上映と、保育サービス、聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映が行われた。今年は「洗骨」に副音声ガイドを制作した。聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映では、「ある精肉店のはなし」を上映した。6か月～4歳未満のお子様をお預かりする保育付き上映では『洗骨』のほか『沈没家族 劇場版』では、ゲストトークも付けた上映を実施。作品監督だけでなく、子育て支援環境の確立及び、地域に根差した実践を行うNPO理事長もお招きして、子育て中の不安を抱える養育者のニーズにも応える企画となった。

広報については、例年行っている川崎市と麻生区を通しての媒体の他、麻生区協力による柱巻き広告や小田急電鉄の協力による駅構内のポスター設置、麻生図書館での企画棚の作成、設置も継続して行われた。また、10月前半の映画祭期間外に川崎市アートセンターの入場時間を利用した映画祭上映作品の予告編を流していただくなど広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。

今年度は継続して行われている地域団体とのつながりのほか、上映作品を通して他団体とのつながりを持つことが多くできた年となった。オープニングでの和太鼓演奏の『雷鼓』、新百合ヶ丘発祥のビッグバンドグループの『ニューリリィアンサンブル』新百合ヶ丘のお肉屋さん『ハウスメッツガーハタ』。映画を媒介として、映画の外の地域や市民活動ともつながる企画を今後もこの地域の特色と強みを活かして発展させていきたい。

2016年度から導入された参加費（2000円）制度は、スタッフ内部で定着してきたが、当日の運営スタッフ人数の確保に苦労する場面もあり、スタッフ募集方法、当日スタッフへの呼びかけや他団体の協力依頼など対応策を検討していきたい。
プログラムのスタッフ公募制に関しては、投票方法や投票結果の採択方法、当選後のワークフローなど昨年度にあがった問題点の改善を行ったが、実施にあたってまだ不備があり、さらなる改善を図りたい。

２．company ma 劇団「間」第５回本公演

『Stopping Rockets ロケットをとめろ！』

Tigar Teatar (クロアチア) + company ma (日本) 共同制作
日本・クロアチア子どものための舞台作品共同創造プロジェクト

開催期間　2019 年 6 月 14 日（金）～16 日（日） 5 回公演
会　場　　川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

構演出　大谷賢治郎
構成　アンニャ・プレティコッサ
美術　レオ・ヴケリッチ　/　音楽　青柳拓次
出演　ヴィエラ・ヴィドフ Vjera Vidov　/　レオ・ヴケリッチ Leo Vukelic　/　リディア・クラリッチ Lidija Kraljić　/　大谷恵理子　/　原田亮　/　森山蓉子

チラシデザイン　奥秋圭　/　ロケットデザイン　庄崎真知子
制作（日本）田事務所
制作（クロアチア）ヴィロヴィティツァ劇場　ザダー人形劇場
後援　クロアチア共和国文化庁　ザクラダ・カルチュラ・ノヴァ　国際交流基金
主催　NPO法人KAWASAKIアーツ

提携　川崎市アートセンター

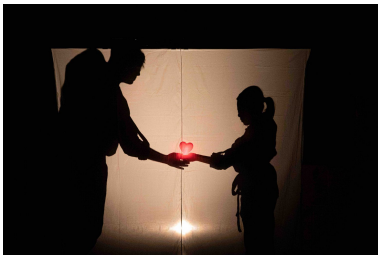
劇団わが町公演でワークショップ講師・演出補を担当し、アーツ理事でもある大谷賢治郎主宰の劇団「間」company ma。「子どもが笑えば、世界は笑う」を合言葉に、新百合ヶ丘を拠点に活動を続け、今回川崎市アートセンターで第5回本公演を行った。

今回は、クロアチアのTiger Theatarとの共同創造プロジェクトで、共同公演とTiger Teatarメンバーによるワークショップを実施した。Tiger Theatarとは、2004年にクロアチア・ザグレブで結成された、ビジュアルアーツを重視した、児童青少年のための劇団で、これまでに15作品を制作、2000回以上に及ぶ公演を、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、スロベニアで行っている。

本来助成金を使用して、演者を日本に招き、１カ月程度の期間でストーリー作成から、美術作成、照明や音響プログラムを作り込んだ作品の共同制作を予定していたが、助成金申請漏れにより予算確保ができない事態となり、限られた予算・期間・手段で、大幅に内容を変更しての実施を余儀なくされた。照明・音響・舞台美術等を限りなくシンプルにし、出演者自身で制作・演出可能な範囲で工夫をし、出演者の自宅や車を使用し、10日間での作品制作となった。その際、クロアチア共和国文化庁、ザクラダ・カルチュラ・ノヴァ、国際交流基金、更に会場である川崎市アートセンターの劇場スタッフの方々の様々なご協力を得ることができ、公演実現に至った。

公演は、ダンボール箱を使用したシンプルな美術ながら、最初の30分弱を来場の子どもたちに、舞台上にあがり、ダンボールに自由に落書きをしてもらうという、参加型の舞台で始まるユニークなものとなった。クロアチアのスタッフの人形遣いや、日本語とクロアチア語の相違や言葉を超えたコミュニケーション、身体や表情、音を使った、リアルタイムで舞台上でクリエーションされる内容に、見る側も一緒に目や耳を済ませて、一緒に空間を作り上げていく、一体感が生まれる臨場感あふれる公演となった。

また、ワークショップは、「クラウン」「人形劇」「舞台美術」の３種類を１回ずつ実施。
いづれもクロアチアアーティストが講師となり、参加者と実際に創作しながら、実施。通訳は、主宰の大谷賢治郎が担当した。ワークショップは、アーティストを目指す青年以上の年齢の参加者が多かったが、非常に積極的に興味を持って参加されており、充実した内容に満足されていた様子であった。
総動員数は、７回（公演とワークショップ合計）で300人であった。
KAWASAKI アーツでは、公演の主催、制作業務を担当した。



[企画・制作事業]

１．バリアフリーシアター制作事業

１９９７年より活動している「バリアフリーシアター制作事業」は22 年目を迎えた。

（１）視覚障がい者向けの活動
・音声ガイド制作と視覚障がい者の介助：視覚障がい者が劇場で映画を楽しむための音声ガイドを６本制作した（映画祭作品 1 本含む）。
副音声カイドと日本語吹替は全て収録し、アートセンターでは、５本の作品に対して、3 回／ 1 作品、一年間に 15 回のバリアフリー上映を実施した。
バリアフリーシアター制作チームのスタッフは、希望があれば新百合ヶ丘駅⇔アートセンターの送迎と劇場内に於ける介助を行っている。
上映終了後に利用者に感想を聞いてガイド作りに反映させている。

■川崎市アートセンターからの委託およびしんゆり映画祭で音声ガイドを作った作品。
①『家に帰ろう』副音声音声ガイド台本 日本語吹替
②『田園の守り人たち』副音声ガイド台本　日本語吹替
③しんゆり映画祭『洗骨』副音声ガイド台本
④『風をつかまえた少年』副音声ガイド台本　日本語吹替
⑤『コンプリシティ優しい共犯』副音声ガイド台本　日本語吹替
⑥『チア・アップ！』副音声ガイド台本　日本語吹替

（２）聴覚障害者に向けての活動
しんゆり映画祭『ある精肉店の話』に対して聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて上映した。

（３）保育サービス付き上映
しんゆり映画祭『洗骨』『沈没家族（劇場版）』に対して保育サービスを実施。

（４）新しいスタッフへの実地研修と副音声ガイド台本制作のミニ講座
毎年、新規に参加する映画祭のボランティアスタッフで バリアフリーセクションの活動に 興味を持ったスタッフへは、映画祭のバリアフリーシアターセクションチーフと新人スタ ッフ連絡係 が中心となって送迎の実地研修・イヤホンガイド付映画の鑑賞体験・音声ガイド台本制作のミニ講座を実施した。
アートセンターのバリアフリー上映で送迎や鑑賞の体験を実施している。映画祭のバリアフリー上映の活動は、 KAWASAKI アーツのバリアフリーシアター制作事業に参加する一つの窓口になっている。
2019 年の映画祭新ボランティスタッフは、 聴覚障がい者が必要とする日本語字幕制作に興味を持つ者、音声ガイド台本作りに参加する者、映画祭の視覚障がい者送迎を担 う者など有望な人材が恵まれた。既存スタッフの森さんが連絡係として新人スタッフを丁寧にフォローした結果であるが『主戦場』た。既存スタッフの森さんが連絡係として新人スタッフを丁寧にフォローした結果であるが『主戦場』の上映を巡っての騒動が大きく報じられ、新人スタッフは定着しなかった。の上映を巡っての騒動が大きく報じられ、新人スタッフは定着しなかった。

（５）スタッフブログとツイッターによる情報発信

平成24 年 6 月から スタートしたブログ・バリアフリーシアター活動日誌（ http://barrierfree theater.sblo.jp/archives/201206 1.html ）は、 9 年間続いている。ブログでは、制作チーム・スタッフがガイド台本制作の様子やバリアフリー上映、制作スタッフの声や映画に関する話題を毎月 2 回程度発信している。活動の足跡を伝える貴重な記録となっている。 Twitter は、外国映画音声ガイド・日本語吹替えアフレコ風景、アートセンターのバリアフリー上映情報、活動日誌のブログ更新、映画祭の情報などの情報を発信している。映画祭『主戦場』上映を巡る騒動が原因で一時炎上し、情報発信をしばらく停止した。

（６）2019 年活動のまとめと課題

現在の実働スタッフは18 名。活動に参加している理由や各自の状況はそれぞれ違っている。音声ガイド台本は、台本担当者 の書いた「たたき台」を元にディスカッションをして作っているの で、違った視点からの意見はとても貴重である。スタッフがそれぞれの状況 に応じた頻度で参加し、自分の特性にあった目標を見つけ、各自の目標を実現できる活動 の場としてほしい。日本映画のいわゆるメジャーな作品には、音声ガイドを聴くことができる携帯アプリ UDcast を利用して視覚障がい者が劇場で映画鑑賞をできる環境が整って来たが、依然としてミニシアター系のほとんどの作品には音声ガイドが付いていない。アートセンターの委託を受けて行っている主に外国映画の原音を聴きながら音声ガイドと日本語吹替を聴いて劇場で鑑賞する機会は依然としてほとんど無いというのが現状である。理由としては、外国作品に対して、音声ガイドを製作する為の許諾を得る為には、時間と制作するメリットを伝えることも難しい為と考えられる。
バリアフリー制作チームとして活動を継続する為に必要なことは、特に朗読者の育成とスキルアップ、声優、演出者、録音編集など専門的な分野の人材の確保である。更に字幕を作りたいという新しいスタッフの要望にも応じられるように方法を探って行きたい 。

２．劇団わが町

アートセンター創設時より、ふじたあさや中心に企画していた市民のための市民による 新百合ヶ丘の市民劇団。 2012 年 6 月に生まれた新しいゆるやかな劇団。劇団員は地域住民の方々を中心に構成されている。2017 年からの第二期の 2 回目の公演となり、総勢 44 名で行われた。年齢制限 はなく、現在 11～78 歳までのメンバーが所属。しんゆりシアターのラインナップの一翼を 担い、長期的に様々な創造活動を行なっている。

■しんゆりシアター 劇団わが町
第 9 回公演 「題未定 ～みんなちがって、みんないい？～」

開催期間 ： 2020 年 2 月 7 日（金）～9 日（月祝） 全5 回公演
会場 ： 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

■公演チラシ

■出演者集合写真

2012 年より始まった劇団わが町、川崎市アートセンター指定管理第二期の第 3 回公演であり、劇団通算第 9 回目の公演となる舞台は、3年前の劇団わが町公演『恐れを知らぬ２７人の劇作家？と４９人の俳優たち』以来の、劇団員たちがオリジナルで本を作成した公演となった。
今回の台本づくりは、前回の公演『みすゞ凛々』のメッセージは、〈私と小鳥と鈴と〉の一節「みんなちがってみんないい」だったが、みすゞの死後９０年を経て、みすゞのうたった「みんなちがってみんないい」社会は実現しただろうか」という問いから端を発した。その問いに応えるかたちで団員から17

人が名乗りを上げ17本の短編が提示され、いづれも自分の日々の暮らしの中からドラマをつかみだしたものとなった。そこから劇団メンバー全員の意見を参考に推敲を重ね、上演台本を完成させた。
作者は10代から70代まで幅広く、表現も言葉のないパフォーマンスながらメッセージ性の強いもの、コメディタッチの会話劇、レビューショー的なシーンのあるもの、SFや寓話性に富んだものと、多様でいろどりあふれる作品となった。
尚、公演タイトルは、『題未定』とし、この作品には、どんな題名がふさわしいか、来場者も作品作りに参加して題名をつけてほしいと呼びかけたところ、多くの題名案が集まった。

当法人は本公演の企画・制作を担った。

[委託事業]
　本年度はなし

II 運営組織の状況に関する事項

１．事務局運営

　近年の事務局の業務予定は、メインとなる映画祭事業が3 月～12 月（会議は 1～2 月もあり）と長期に渡ってきており、12～2 月に劇団わが町の制作、合間に委託事業等といったスケジュールで行ってきたが、2019年度は劇団わが町の制作が 9 月～12 月だったこと、company ma の公演が6 月だったことで、既存事業が重なり事務処理が年末から春先にかけて滞る事態となった。特に助成金の申請・報告決算と映画祭の後処理・始動の時期が重なる4~5月に、事務局員2 名のうち 1 名が稼働できなかった為、事務処理が遅れたり手が回らない部分が生じた。加えて担当間の連絡不足もあり、申請等に漏れが生じるといった事態が発生してしまった。不備の再発防止のために、業務フローの整備や、確認を徹底する必要がある。また、映画祭終了後のボランティアスタッフの確保や、年間を通じての活動業務の配分も再検討は重要な課題である。 資金運営面では映画祭事業の収益が法人の運営に直接関わる状況が続いており、負担金や助成金の増減が、法人の経営に大きく影響を与えている。

　今年度の映画祭での、上映を予定していた作品の取り下げにあたっては、表現に関わる様々な局面への萎縮を招きかねない事態となり、映画祭を応援してくださる多くの方々の信頼を損なう結果となった。映画関係者の方々の働きかけをきっかけに、取り下げた作品の会期中の上映を再決定し、無料上映を行った。例年の上映に加え、会場確保や警備の調整、問い合わせ対応等を市民スタッフ・運営委員・事務局が担った。各日の上映現場では予定していた人員が不在となる状況も発生したが、関係各所の協力により運営が行われた。また、再決定した作品の無料上映に際しては有志の一般市民の方々にも警備ボランティアとしてご協力いただき、事故なく映画祭を終えることができた。
　今回の事案に伴い、映画祭組織や法人組織としての体制の不備や見直すべき問題点が多く生じ、理事会において、運営委員の辞任と、新たに運営組織を立ち上げることを決定した。問題点の検証や課題を整理し、新運営組織の立ち上げた後、具体的に検討を進めていくこととした。

２．事業展開

平成 30 年度は、映画祭事業の他の文化事業は、バリアフリー副音声日本語吹替え制作、劇団わが町企画・制作、company ma 公演の主催といった前年度とほぼ同内容の事業展開となった。

３． 役員

役員の氏名及び職制上の地位

地 位／氏 名／専 門
理 事長／藤田 朝也／演劇・ミュージカル
専務理事／中山 周治／地域・教育・映画祭
理 事／黒田 隆／音楽
理 事／千葉 茂樹／映画・映画祭
理 事／森 正敏／演劇
理 事／安岡 卓治／映画・映画祭
理 事／瀧澤 春江／映画祭・バリアフリーシアター
理 事／岩倉 宏司／宣伝・広報
理 事／大谷 賢治郎／演劇
理 事／徳沢 純子／映画祭
監 事／白鳥 あかね／映画・映画祭
顧 問／佐藤 忠男／映画評論家
シニア・アドバイザー／下八川 共祐／昭和音楽大学理事長
シニア・アドバイザー／岩崎 敬／環境デザイナー

以上

貸借対照表

令和02年3月31日現在

特定非営利活動法人KAWASAKIアーツ

（単位：円）

科目		金額		
Ⅰ	資産の部			
	1．流動資産			
	現金預金	5,036,363		
	未収金	1,186,000		
	流動資産合計		6,222,363	
	2．固定資産			
	（1） 有形固定資産			
	車両運搬具	0		
	什器備品	0		
	その他の有形固定資産	0		
	有形固定資産計	0		
	（2） 無形固定資産			
	ソフトウェア	0		
	無形固定資産計	0		
	（3） 投資その他の資産			
	敷金	0		
	投資その他の資産計	0		
	固定資産合計		0	
	資産合計			6,222,363
Ⅱ	負債の部			
	1．流動負債			
	未払金	0		
	前受民間助成金			
	短期借入金	2,824,961		
	未払費用	0		
	未払法人税等	70,000		
	預り金	17,310		
	流動負債合計		2,912,271	
	2．固定負債			
	長期借入金	0		
	退職給付引当金	0		
	固定負債合計		0	
	負債合計			2,912,271
Ⅲ	正味財産の部			
	前期繰越正味財産		2,521,138	
	当期正味財産増減額		788,954	
	正味財産合計			3,310,092
	負債及び正味財産合計			6,222,363

活動計算書

平成31年4月1日から令和02年3月31日まで

特定非営利活動法人　KAWASAKIアーツ

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ 経常収益			
1. 受取会費			
会員受取会費	70,000	70,000	
2. 受取寄附金・協賛金			
受取寄附金	390,640		
受取協賛金	400,000	790,640	
3. 受取助成金・委託金等			
川崎市負担金	6,000,000		
日本芸術文化振興助成金	1,906,000		
麻生区地域振興課　区委託金	997,100		
文化財団委託金			
その他助成金・委託金	0	8,903,100	
4. 事業収益			
①芸術文化を通したまちづくり事業収益（映画祭事業）			
チケット販売物販収益	2,829,060		
広告収益	920,000		
その他収益	695,260		
② 文化芸術振興事業収益			
バリアフリー委託費（文化財団）	2,190,000		
映画製作費収益	0		
その他収益	0	6,634,320	
5. その他収益			
受取利息	48		
雑収益	595,400		
借入金債務免除益	0	595,448	
経常収益計			16,993,508
Ⅱ 経常費用			
1. 事業費			
（1） 人件費			
給料手当	4,400,000		
福利厚生費	510,967		
雑給	0		
謝礼	0		
人件費計	4,910,967		
（2） その他経費			
フィルム仕入	1,788,618		
その他仕入	4,894		
広告宣伝費	129,070		
リース料	11,016		
地代家賃	1,933,425		
事務用消耗品費	226,547		
通信交通費	780,531		
外注費	874,163		
交際費	1,277,643		
保険料	53,020		
備品消耗品費	4,889		
賃借費	722,200		
会議費	94,770		
機材費	346,262		
製作費	389,290		
印刷費	1,397,797		
支払報酬料	287,000		
その他経費等	902,452		
その他経費計	11,223,587		
事業費計		16,134,554	
2. 管理費			
（1） 人件費			
役員報酬	0		
・・・・・・・・・			
人件費計	0		
（2） その他経費			
会議費	0		
・・・・・・・・・			
その他経費計	0		
管理費計		0	
経常費用計			16,134,554
当期経常増減額			858,954
Ⅲ 経常外収益			
1. 固定資産売却益		0	
過年度損益修正益		0	
経常外収益計			0
Ⅳ 経常外費用			
1. 過年度損益修正損		0	
・・・・・・・・・		0	
経常外費用計			0
税引前当期正味財産増減額			858,954
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			788,954
前期繰越正味財産額			2,521,138
次期繰越正味財産額			3,310,092

※今年度はその他の事業を実施していません。

財産目録

令和02年3月31日現在

特定非営利活動法人KAWASAKIアーツ

（単位：円）

	科目	金額		
Ⅰ	資産の部			
	1．流動資産			
	現金預金	5,036,363		
	未収金	1,186,000		
	流動資産合計		6,222,363	
	2．固定資産			
	（1） 有形固定資産			
	車両運搬具	0		
	什器備品	0		
	その他の有形固定資産	0		
	有形固定資産計	0		
	（2） 無形固定資産			
	ソフトウェア	0		
	無形固定資産計	0		
	（3） 投資その他の資産			
	敷金	0		
	投資その他の資産計	0		
	固定資産合計		0	
	資産合計			6,222,363
Ⅱ	負債の部			
	1．流動負債			
	未払金	0		
	前受民間助成金			
	短期借入金	2,824,961		
	未払費用	0		
	未払法人税等	70,000		
	預り金	17,310		
	流動負債合計		2,912,271	
	2．固定負債			
	長期借入金	0		
	退職給付引当金	0		
	固定負債合計		0	
	負債合計			2,912,271
	正味財産			3,310,092